

Vol.32
2017 SUMMER

LINKAGE

[繋ぐ]

愛でる Special Issue:

夏の暑さをしのぐ 先人の知恵「油団」

先どる 日本の折り紙を昇華させた
花型ペーパークラフト「折花」

出会う スポーツマンシップが育んだ
お客さま重視の営業姿勢

後世に受け継ぐ 夏のしつらい「油団」

「油団」とは、何層にも貼り重ねた和紙のうえに油を塗った、日本の伝統的な敷物のこと。

つるりとした表面が、触れた体の熱を吸収し、夏の暑さをしのいでくれます。

また耐久性に優れ、「百年使える」生活用品として、古くから日本各地で愛用されてきました。

そんな「油団」の生産も、いまでは福井県鯖江市にある表具店『紅屋紅陽堂』さんのみとなっています。

日本の気候風土と先人の知恵が育み、代々受け継がれてきた「油団」。

そこには、一切の妥協を許さない職人たちのきめ細やかな技術と使命感、

多くの日本人が忘れつつある心の豊かさが詰まっているのです。

愛でる P01

後世に受け継ぐ
夏のしつらい「油団」

特別企画 P06

TSUNAGUアーカイブス
ご紹介した作家たちの「いま」を
最新情報とともにレポート

使う P06

1枚から紙を買える
ネット通販「Papermall」

先どる P07

日本の折り紙を昇華させた
花型ペーパークラフト「折花」

伝える P09

怪童丸の伴侶から届いた
礼節を心得た返書

出会う P11

スポーツマンシップが育んだ
お客さま重視の営業姿勢

深める P13

KPPの最新ニュースを
キャッチアップ

訪ねる P15

紙の魅力を体感できる
「ペーパーイベント・カレンダー」

作る 付録

布施知子さん考案による
七夕柄の「自在トレイ」



紅屋紅陽堂の3代目店主・牧野友美さんは、屏風や障子、襖、掛け軸など一般的な表具だけでなく、寺院の壁装や金屏風なども手がける。美術品の修復にも造詣が深く、手がけた作品は世界中の美術館に数多く収蔵されている。

ベニヤこうようどう
紅屋紅陽堂

■住所:福井県鯖江市田村町2-10
■電話:0778-62-1126
■FAX:0778-62-2870

掛け軸、屏風、額、襖、障子などの美術表装、古書画修復を手がける。「油団」の製造技術は、福井県指定無形文化財の認定を受けている。

も視覚的にも涼しい感覚は、「体感してみないとわからない」というものなすけま。夏の間、子どもたちはいつも気持ちよさそうに「ごろごろしている」という牧野さんの言葉が、その心地よさを物語っています。

では、和紙を重ねたうえに油を塗った油団が涼しく感じられるのはどうしてなのでしょう。そのメカニズムについて質問すると、「テレビの取材などで科学的な検証もしてもらったけど、正確には説明されていないんです」と牧野さん。「熱を伝えやすい表面の(荏胡麻)油が熱を逃がし、空気を含む和紙の層が熱を吸収するという人がいるけど、サーモグラフィを使った実験してみると油団の熱伝導率はあまり良くない。ほかにも気化熱の効果で熱を冷ますなど諸説ありますが、確実な証明には至っていないです」と話します。現代の科学を用いても説明できない先人の知恵。和紙を知り尽くした当時の職人たちが、試作と改良を繰り返すなかでたどり着いた技術には、ただただ驚くばかりです。

次に実際に油団をつくらせている工房を案内していただきました。板張りの広い工房内には、ドンドン

と音が響いていきます。油団づくりは、まず、油団台と呼ばれる大きな和紙の上に、鳥の子紙という丈夫な和紙を継ぎ合わせ、仕上がりサイズに整えたものを配置。その上に生麩糊(せいぶこう)を使って楕(だ)100%の越前和紙を2〜3ミリほど重なるように貼り合わせ、棕櫚製の固い刷毛を打ち、下の紙の繊維を引っ張り上げることで上に重ねた和紙の繊維とよく絡み、密着度がアップ。最終的に14層の和紙になるまで刷毛で打つ作業を繰り返します。その回数は、8畳サイズで約1万回。しゃがみこんだ姿勢で行うので、体力的にかなりきつい作業です。その後、しばらく寝かせて湿気を取り除いたのち、裏面に柿渋、表面に荏胡麻油を塗って天日で乾燥させたのち、木綿の布でつぶした豆腐で磨いて艶を出し、ようやく完成します。1枚の油団が完成するまでに要する時間は、3人掛かりで約1カ月。これだけの手間と時間がかかるため、価格は1畳あたり約14万円と高額ですが、その耐久年数は百年以上、さらには使い込むほどに性能が高まるなど、その値段に見合うだけの価値があります。

紅屋紅陽堂は油団だけでなく、掛け軸や額、屏風などの表装、襖や障子など建具の新調や修理、張り替えなどを手がける。今年で創業100周年を迎えた老舗表具店です。住宅の西洋化が進むなかで、床の間や和室が減り続ける今日にあっても、他店では手に負えない特殊な表具や、貴重な文化財の修復などの依頼が絶えることがありません。「私たちの生業である表具は、(おまかせ)具(ぐ)え(え)る」と書きます。表とは書画を指すので、その作品を観た方が「いい表具だ」と言えはるその表具は出来なもので、その反対に「いい絵だ」と言っていたくことが仕事の評価であり、私たちの本望なんです」と牧野さん。その二つひとつの言葉から、自らの仕事の本質を理解し全うする、職人としての誇りを伺い知ることが出来ます。



柔らかな風を送る団扇や扇子、風にふわりと揺れて涼やかな音色を響かせる風鈴、日光と人目を遮り涼風を部屋に取り込む簾や蓆(むしろ)など。これらはすべて、高温多湿の日本の夏を、少しでも快適に過ごすために考え出された生活用品です。先人たちは日々の暮らしのなかで知恵を絞り、自然から得ることのできる材料に工夫と手間をかけることで、夏の暑さを上手に乗り切る道具をしつらえてきたのです。

「油団」とは、幾重にも貼り重ねた和紙の表面に荏胡麻油を塗ったもので、畳のうえに敷いて使用されます。藁草や籐製の敷きと同一ように植物由来の素材でつくられた和紙製品であり、触れるとひんやりと感することから、夏の必需品として長く重宝されてきました。しかし、良質の和紙を多量に使用すること、完成までに多くの時間と労力が必要とすることもあって高額であったため、一般家庭よりも寺院や料亭、名家などで多く使用されてきたそうです。この油団を、現在でも製造しているのは全国でただ一軒のみ。福井県鯖江市にある表具店「紅屋紅陽堂」さんだけがその技術を継承し、昔と変わらない油団の製造を手がけています。

「いくら話しても伝わるものじゃないから、まずは寝つ転がってみてよ」。飾らない笑顔でそう話すのは、紅屋紅陽堂の3代目店主・牧野友美さん。「油団は夏の敷物だから、6月になったら出して10月になる前にしまおう。それぞれ衣替えのタイミングで出し入れする家が多いかな」。私たちをご自宅に招き入れ、客間と仏間それぞれの畳の上に敷かれた油団へ座るように促してくれます。

表面は鏡面のようにつるんとしていて、深いあめ色。部屋の柱や夏障子、座卓の脚が映り込むほどの光沢があり、かの高浜虚子が詠んだ句にも、「柱影 映りもぞする 油団かな」という夏の句があるほどです。実際に寝転がって触れると確かにひんやりとしていて、心地よい。透明感があり、触覚的に



牧野さんが全国から取り寄せた良質の手漉き和紙。近年は、地元・越前和紙だけを使用し油団をつくる。



油団づくりのための広々とした工房。糊が乾いてしまわないように、和紙を貼る作業は休みなく続く。



上下の和紙の繊維を絡ませるための「打ち刷毛」(右)と、和紙に生麩糊を塗るための撫で刷毛(左)。

特別企画

過去に登場した作家の“いま”をレポート
「TSUNAGUアーカイブス」

創刊11年目突入を記念した特別企画。
これまでに本誌でご紹介した作家・企業さまの活躍をご紹介します。

奉納用の大絵馬から伝統折り紙の復刻まで、
古くて新しい「折り紙」の魅力を発信



① 西年限定の個人用絵馬(左右)と岡山神社オリジナルおせんべい ② 岡山神社に奉納された大絵馬
③ 折り紙作家、中島種二が考案した戦前の原書をベースにした著書「カワイイヨリガミ細工」(誠文堂新光社)
④ 6月にリニューアルされた『めでたきびだんご』(山方永寿堂)では、梱包紙のデザインと同梱される折り紙を担当

折り紙デザインユニット

COCHAE コチャエ

DATA TSUNAGU掲載 | 2012年夏号 (Vol.12)
WEB | cochae.com



“折り紙をもっとポップに!”をキーワードに、紙のバズルやグラフィック折り紙などを創作するデザインユニット、COCHAEさん。現在も東京と地元・岡山を拠点に、ワークショップや展示、他業種とのコラボなど、幅広い創作活動を展開しています。その新たな試みの一つとして制作したのが、備前岡山の総鎮守・岡山神社に奉納される「干支の大絵馬」。これは大きな酉の顔を模した大絵馬に参拝者が絵馬札を差し込むと、その1枚1枚がふわふわとした“酉の羽”になるというもの。そのほか、岡山の銘菓“きびだんご”の折り紙付きパッケージの製作や、戦前の折り紙細工の原書にアレンジを加え、復刻版として出版するなど、精力的な活動を続けています。折り紙の魅力を掘り起こし、新たな息吹を吹き込むコチャエさんの次なる挑戦に注目です。

【国立新美術館 SFT 10周年企画 from TOKYO 2017】

■会期:6月21日(水)~8月21日(月) ■会場:B1 SFT GALLERY ■入場料:無料
【SFT×COCHAE】限定ポストカード(オリジナル)を展示・販売中。

INFO

使う 鮮度の高い「紙・モノ・情報」をキャッチ 「PAPER MALL Selection」

当社が運営する紙の総合サイト「PAPER MALL」。
その便利な機能やおすすめ商品などをピックアップしてご発信していきます。

第2回テーマ 「ペーパークイリング」に挑戦しませんか?

シンプルな技法と造形の味わいの深さから、愛好者を増やし続けている「ペーパークイリング」。リボン状に細長くカットした紙を、ニードルを軸にして巻き付けることで渦巻状の基本パーツを作成。それらを緻密に組み合わせることで作品をつくり上げる。華やかで繊細なペーパークラフトです。近年では「ボタニカルクイリング」とも称され、美しい花や植物をモチーフにした作品を額に入れて飾ったり、グリーティングカードのデコレーションに用いるなど、その用途の幅広さも人気の理由だとか。PAPER MALLでは、はじめての方にも使いやすい初心者用キットを多数取り揃えています。新たな趣味をお探しの方、チャレンジしてみてくださいね。



PAPER MALL への
アクセスはこちらどうぞ!

ペーパーモール 検索
www.kpps.jp/papermall/



できたての油団(左上)と牧野さんのご自宅で使用されている油団。使えば使うほど色合いが強くなり、味わいが増す。

また油団づくりも、和紙や布、糊といった材料の特性を知り尽くし、繊細な技術と豊富なノウハウとを併せ持つ表具師だからこそ、つくることが出来るものなのだそうです。「うちは祖父が創業した表具屋。開業当初から油団をつくっていたそうですが、より良いものをつくるために、油団を手がける他の表具店に出向いたそうです。そこで行程ごと手間賃を払ってまで見学させてもらい、技術を吸収してきたと言っていました」と牧野さんは話します。

「それに、油団づくりがこの福井に残ったのも、この地域にもつくりの文化が続いているからこそ。うちががんばっただけではありません」と牧野さん。福井県の中央部に位置する丹南地域は、伝統産業が集積する世界でも稀なエリアであり、国内シェア9割を占める眼鏡をはじめ、和紙、漆器、打刃物など、ものづくりの伝統文化が根づいていたことも、油団の技術継承の要因になっているそうです。

油団の歴史についての文献は少ないものの、少なくとも江戸時代には存在していたといわれ、昭和30年代頃までは、福井県でも多くの表具店が油団を手がけていたそうです。しかし、現在でも油団をつくり続けている表具店は、紅屋紅陽堂のみ。その製造方法と技術は、三代目店主である牧野さんだけが知るものです。「油団のつくり方は、弟子も含め、教えてほしいという方には基本的にオープンにしてみました」と牧野さん。「油団のルーツは、オンドル(朝鮮半島で普及した床下暖房。床の温かさをより感じやすくするために油をしみこませた厚紙を貼った)だと思っています。朝鮮半島ほど寒くないので、日本でオンドルは普及しませんでした。日本にいた朝鮮の方がその技術を活用して油団を考案したのではないかと、そもそも他人から教えてもらったものを独り占めするなんて、おかしな話でしょ?」と話します。

最後に、需要が縮小傾向にあるなか、膨大な手間と労力が必要とする油団づくりを続ける理由を

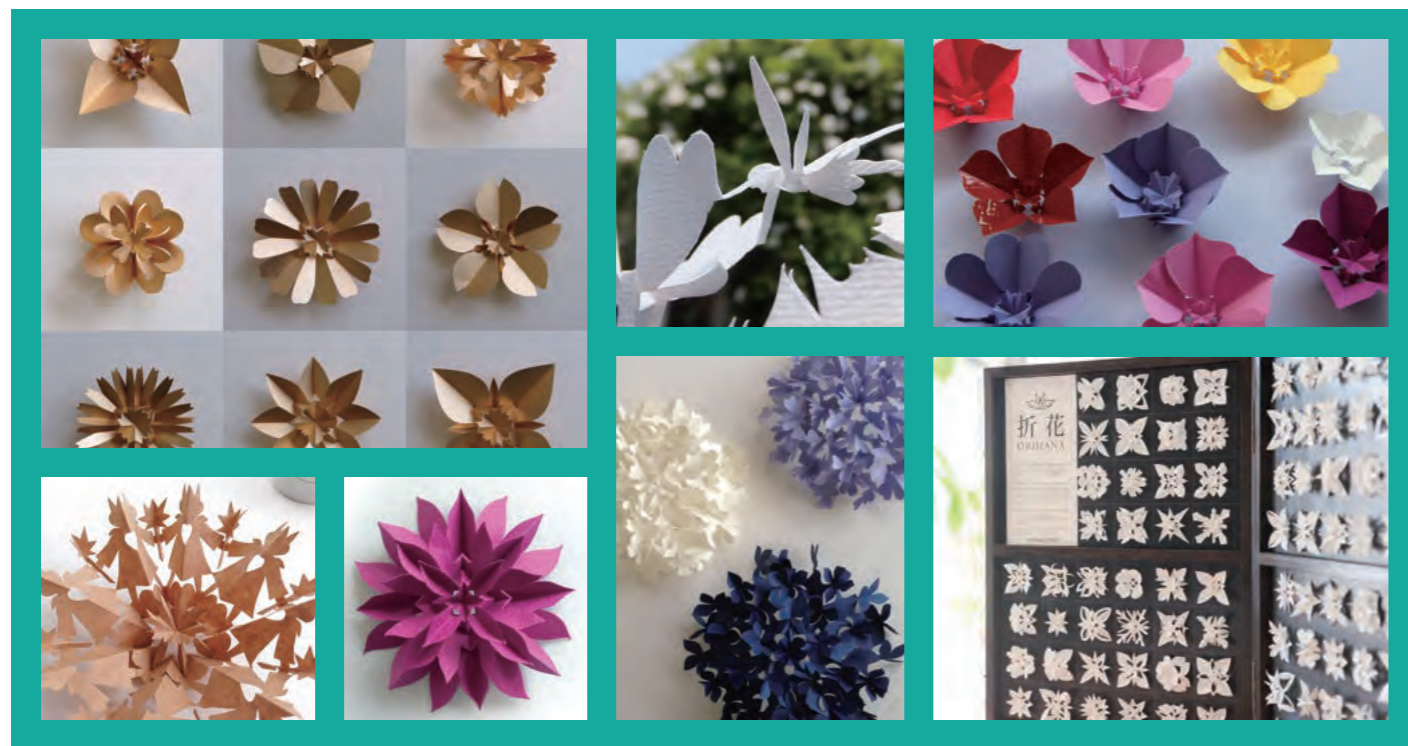
お伺いすると、「自分がいいものだと思っているから」というシンプルな答え。「私たちの生活は、先人たちの知恵のうえに成り立っています。人々のためにならない努力と知恵が詰まった本当にいいものだからこそ、可能な限りつくり続けていきたいですね」と牧野さんは話します。

そして牧野さんが、先代にあたる祖父、先代である父親から受け継いだ油団づくりの技術は、次の世代へ。息子である由尚さんへとバトンが引き継がれています。今後の抱負を聞いてみると、「油団を欲しいと言ってくださるお客さまに対して、いねいに油団をつくるだけ。その油団が百年持つかどうかは、僕たちの手仕事にかかっている」と由尚さん。その力強い眼差しには、一切の妥協を許さずいものをつくり続ける、職人としてのまっすぐな思いが溢れています。

「自然を活用し、共存しながら生活する」。私たちの先祖が日々の暮らしのなかで培ってきた生活の知恵や知識は残念ながら、徐々にその姿を消しつつあります。テクノロジーの進化は私たちの生活に多くのものをもたらしましたが、それだけでは得ることのできない豊かさがあることも事実です。歴史と風土に育まれ、日本人ならではの感性と職人の誇りが息づく油団には、次の未来を考えるヒントがあるはずです。



父であり師匠でもある3代目に師事し、技術向上に努める牧野由尚さん(左)と弟子の木村光さん。



日本の折り紙を昇華させた、 花型ペーパークラフト『折花』

自然が生み出した美しいラインを単純化したシンプルなフォルムと、人々の心を潤すアロマの香り。『折花(おりはな)』とは、1枚の紙から作り出される花型のアロマディフューザーのこと。折り紙、切り絵といった日本の伝統工芸の手法を組み合わせることで花の魅力を表現する、新しいかたちのペーパークラフトです。見る人を魅了する美しいパターンは、現在までに考案されたものだけでも約700種類。花の中心部にあるくぼみにアロマオイルを垂らすことで、その時の気分にあった香りを楽しむことができます。小さな紙を折りたたみ、数カ所の切り込みを入れるだけで精緻な花の造形が目の前に現れるペーパーワークに、全世界から熱い視線が注がれています。



—『折花』が生まれるまでの経緯を教えてください。

パブリックデザイン全般を手がける大手デザイン事務所を退社後、屋外緑化の開発に携わったことで海外のフラワーショーを観に行くようになりました。そこでアロマの魅力に触れ、より手軽に楽しむためのプロダクトとして考案したのがこの『折花』です。それ以前から花や植物の種類に詳しく加えて、高校時代から多くのクリスマスカードを手づくりするなど紙に慣れ親しんでいたことも、『折花』が誕生する下地になったと思います。

—『折花』のデザイン的な特徴は？

造花や他のクラフト作品など、花そのもののかたちをめざして本物に近づけるクリエイティブワークもありますが、『折花』はその形状を意識し、記号化しているのが特徴です。全体のフォルムをどう簡略化すればその花らしく見えるか、その花に対する人々のイメージに近づかかを考える点で、他の作品とは一線を画していると思っています。比較的近いと思うのが、日本固有の紋章である「家紋」です。花びらの形状と重なり方、角度のポイントを押さえた普遍的なかたちだからこそ、どの国の方が見てもそれらしく感じるのではないのでしょうか。『折花』は、アート、デザイン、クラフトの中間に位置するものだと考えています。

—材料となる紙や道具は何を使用していますか？

多くの作品でマーメイド紙とサーブル紙を使用しています。特にマーメイド紙は切れ味もよく、クラフトに最適の紙だと思います。問題は、海外でどのように紙を調達するか。私はパリで展示会や講習会を開く際、代用品としてキャンソン紙を使用しますが、折り目が割れてしまうことがあり、あまり向いていないと思っています。また『折花』では、(株)近正(本社:大阪府堺市)社製の葡萄収穫用のハサミを使用していますが、理想の切れ味を出せるのは特定の品番のもののみ。それが廃番になってしまいストックも数少なくなったので、日々さまざまなハサミを試しています。

—今後の展開についての抱負を教えてください。

これまでに『折花』のノウハウを応用したカードやランプシェードなどの商品開発、空間演出やファッション、華道とのコラボレーションなど、幅広い展開を試みてきましたが、一般に向けたプロダクトの第一弾として指輪を販売する予定です。また、定期的に開催している講座やワークショップを通して、『折花』の仲間を増やすことが目標です。子どもからシニアの方まで、国や文化の違いを超えてつながることのできるこの『折花』を、日本の新しい紙文化として世界に広げていきたいですね。



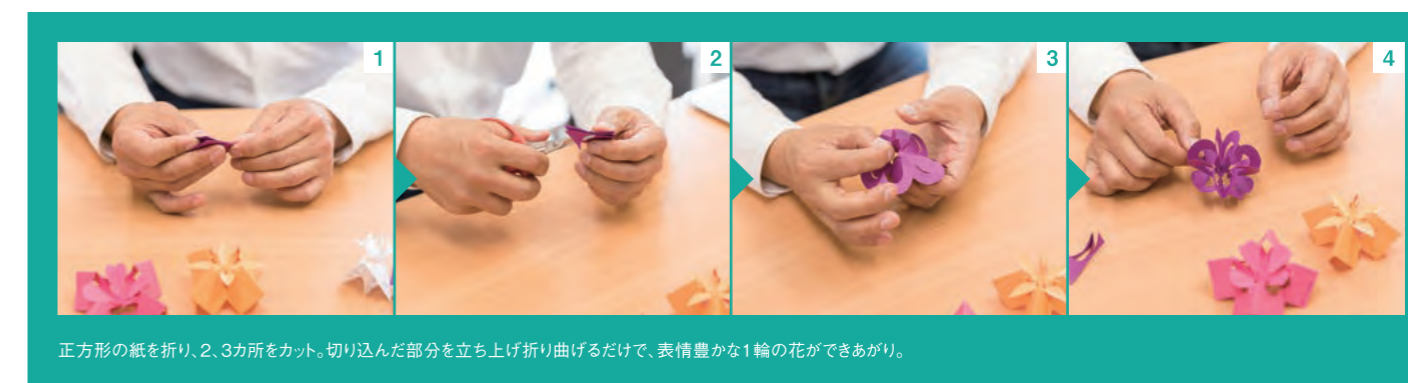

三谷 基 さんによる『折花』講座

現在、A&E事務所(東京都渋谷区代官山町)を会場として、『折花』講座を定期開催しています。

毎月第2、第4土曜日
●午前の部 10:30~12:30 ●午後の部 14:00~16:30

※ともに定員は8名。
※その他、2カ月に1度、京都、大阪でも講座を開催しています。
※日程は変更になる場合がありますので、下記ホームページにてご確認ください。

『折花』講座の詳細、お申し込み HP:orihana.com



「手紙」は語る

植村 勲音

人間は表現する動物だというのが、手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。手紙は手書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

第十一回 木谷 實

木谷實は、怪童丸と称され、呉清源とともに昭和の囲碁史を彩った偉大な棋士だった。囲碁以外にこれといった趣味を持たない父と長いこと一緒に暮らしたので木谷實の名前くらいは承知していたが、実際本人に会えたのは、「人に歴史あり」という番組のお蔭だった。

ちょうど半世紀まえ、昭和四十四年秋のことである。お弟子さんのおおい門の総段数が二百段（現在は孫弟子も含め五百段とか）に達したというので、わたしはディレクターとして木谷實を紹介する番組に関わった。残された台本を見てみると、出演者の顔ぶれは、ご本人、美春夫人、三女の礼子さんのほか、大竹英雄、石田芳夫、武宮正樹、小林光一、加藤正夫、趙治勲など一門のお弟子さんが三十二名。一門以外の棋士が、呉清源、坂田栄男、橋本宇太郎、村島誼紀、前田陳爾、それに囲碁ジャーナリストの江崎誠致、三谷水平。これ以上はないという豪華な顔ぶれである。

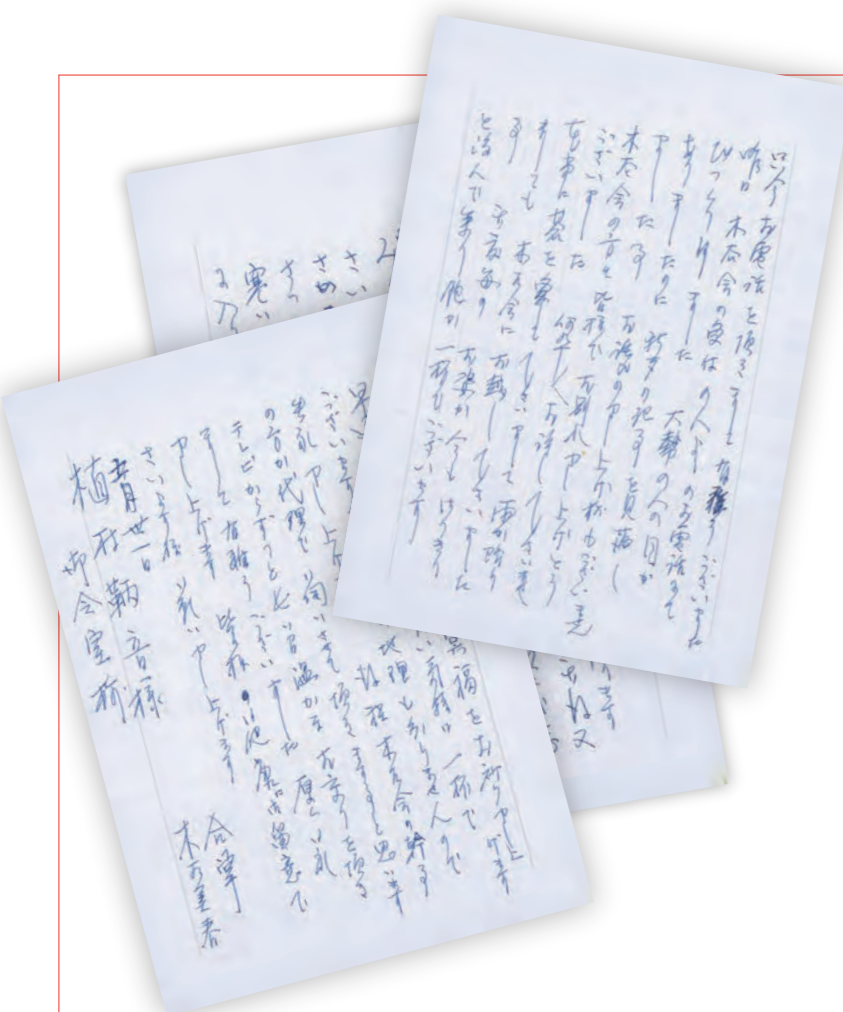
木谷實の碁は求道者のそれであったといわれる。生涯弛みない強靱な碁を求めつづけた。木谷が昭和二年、十八歳の若さで四段に昇段、翌三年、生涯の好敵手、呉清源が中国から来日、信州地獄谷温泉にこもったふたりはいわゆる「新布石」

部屋に世話になったことがあり、朝六杯、夜七杯のどんぶり飯を食べる大食漢だったそうで、あの無念はそうとうのものであったろうと推察するのである。

その後、わが家と木谷家、木谷道場のお歴々とは、以前に増して関係が深くなった。というのは、怪童丸のファンだった父が木谷さんを紹介してくれとわたしに依頼し、わたしがそれに応えたからである。あれは、日頃ろくに口もきかない親不孝もののわたしが唯つくした親孝行だったかもしれない。

父は、木谷さんが亡くなるまでの六年間、土曜日のたびに四谷の木谷道場に連れられ、木谷さんが亡くなってからは、会場を市ヶ谷の日本棋院に移した木谷会に嬉々として通った。

当然のことながら、人間好きの父は美春夫人、礼子嬢、大竹塾頭格、加藤正夫九段などと交友を温めた。美春夫人は、先ほどの、若き日の木谷と呉が新布石を研究した地獄谷の旅館の娘さんで、これを縁に木谷さんと美春さんは結ばれたのだった。



を考案、囲碁は新しい時代の幕をあける。それから十年後の昭和十三年、木谷は本因坊秀哉引退碁の相手選ばれ、その対戦は川端康成の小説『名人』となった。


生来の体質の故か、真剣勝負の過酷さの故か、木谷は何度も脳溢血で倒れている。わたしは取材のため幾度か四谷の木谷道場に彼を訪ねたが、木谷さんの口は重かった。再起するたびに棋風を変えて強くなったという坂田栄男の証言もあるが、やはり発作の後遺症はどこかにあったのだろう。代わりに奥さんの美春さんや礼子さん、あるいは塾頭格の大竹英雄さんが質問に答えるのが常だった。

いまでもときどき思い出して吹き出しそうになるのだが、番組の放送後木谷道場を訪ねたわたしに、美春夫人がうな重を取り寄せてこ馳走してくださいとある。応接間にうな重が運びこまれて、木谷さんが入室、いざという間際に大竹さんが入ってきて、「おとうさん、身体に悪いからぼくが食べます」。木谷さんはいささか気落ちした様子で退席された。後で知ったのだが、鈴木為次郎七段の門下生になるまで木谷少年は相撲の二所ヶ間

内助の功というのが、美春夫人こそ、内助の功といわれるにふさわしい。勝負師の夫を陰に陽にささえ、立派な子どもたちを育てた。全国を行脚し、「こんどこそ鯛だ」といながら連れかえる棋士の卵たちを彼女はいやな顔ひとつせずわが子同様に育てあげた。弟子たちは夫人を親しみをこめて「おかあさん」と呼んだ。いまその弟子たちのおおくが日本の棋界を支えている。


木谷さんからの手紙は、年賀状一通しか見当たらないが、美春夫人からの手紙は、父宛のもの、わたし宛のもの、わが家にたくさん遺されている。「大勢の人の目がありましたのに新聞の記事を見落しました事お詫びの申し上げ様もございません。木谷会の方々皆様でお別れ申し上げとうございました。（中略）テレビからずっと長い間温かなお交りを頂きまして有難うございました」

これは、わたしが父の死を報告した連絡への返信の一部。晩年の怪童丸は体調のこともあり直筆の手紙はほとんど書かれなかったのではないかと推察するが、美春夫人の手紙は、それを補って余りある。



著者略歴
うえむら つとね
植村 勲音 エッセイスト

小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映、テレビ東京に勤務。1994年同局常務取締役。1999年(株)テレビ東京制作代表取締役社長。DACグループ顧問。農業生産法人NIKI Hillsファーム相談役。2005年「直木三十五伝」で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年「歴史の教師植村清二」で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に「夏の罫」「気骨の人 城山三郎」など。



き たに みのる
木谷 實
棋士(囲碁)
1909-1975

兵庫県神戸市出身。日本棋院囲碁殿堂入りを果たした20世紀を代表する棋士。呉清源とともに棋界に大変革をもたらした「新布石」の創始者として知られる。18歳で出場した新進打ち切り戦では10人抜きを果たし「怪童丸」の異名もとる。自宅を木谷道場として内弟子を取り、大竹英雄名誉棋聖、加藤正夫名誉王座、二十四世本因坊秀芳など、数多くの名棋士を育てた。

▶ 宮城県東松島市より感謝状授与

当社は2015年より、一般財団法人C.W.ニコル・アフンの森財団が進める「震災復興プロジェクト」に賛同しています。このプロジェクトは宮城県東松島市で津波被害に遭った小学校の高台移転ならびに学校裏手に「復興の森」をつくり、日本初となる公立の「森の学校を創る」活動を支援するものです。子どもたちに「復興の森」の中でさまざまなことを学び育ててもらいたいという思いから、2016年3月に

は和紙の原料となる楮こうぞと三桠みつまたを植樹し、11月に収穫しました。今後は、この材料を使って紙をつくるイベントを計画しています。

地域の小学生たちは長い間仮設校舎での授業を余儀なくされてきましたが、今年1月には高台に学校が完成。同校での授業がスタートしています。竣工式において、当社はプロジェクト参加による復興支援が認められ、東松島市長より感謝状が授与されました。



▶ むさし野紙業が小学生の課外授業を受け入れ

当社関係会社である「むさし野紙業株式会社」は、古紙リサイクル事業を通して社会に貢献することを目的に地域活動を行っています。同社横浜営業所はその一環として、昨年に続き近隣の横浜市立新吉田第二小学校4年生を対象に課外授業を実施しました。古紙ヤードで回収された紙や圧縮機などの見学をはじめ、紙がリサイクルされる仕組みや必要性についての授業などを行いました。



当社には野球部、テニス部などの部活動があり、社員の心と体の健康維持に役立っています。また、社内外の方との交流のきっかけにもなっています。その中で私がいま熱中しているのは華道部です。入社するまでとくに生け花に興味はなかったのですが、気づけば何年間も続けています。忙しいときや落ち込んでいてやる気が出ない日、お花を生けはじめるというの間に癒やされていき、花にはそういう効果があるのだと実感できます。ぜひ一度お試しください。(M.I)

梅雨の季節となりました。子どもの頃(もちろん昭和ですが)は雨がシトシトと降り続き、毎日鬱陶しく思っていました。外に遊びに行くこともできず、当時はTVゲームやスマホでのゲームがあったわけでは無い時代。どのように過ごしていたのかあまりにも遠い出来事ではないかと思ってしまう。思い出すことはできませんが、夏休みを楽しみにしていたのは間違いないようです。現在は気候変動のせい、梅雨らしさが薄れてきたような気もしますが、それでも梅雨空の下の紫陽花は色彩も美しく、心が和んできますね。(J.S)

編集後記

▶ 合弁会社「成都新国富包装材料有限公司」のフィルム印刷工場が竣工

当社と富士特殊紙業株式会社、中国の新希望六和食品控股有限公司の3社によって設立された合弁会社「成都新国富包装材料有限公司」のフィルム印刷工場が完成し、2017年3月21日に竣工式が執り行われました。

当工場は、大気汚染の原因となる揮発性有機化合物(VOC)を徹底的に抑えた環境配慮型工場として、ハム・ソーセージ向けフィルム印刷を行います。新工場完成により、当社はケーシング用シュリンクバリアナイロンフィルムなど環境負荷軽減に対応した高付加価値製品の供給をはじめ、中国における軟包装事業の展開を加速させてまいります。



▶ 「2017 九州印刷情報産業展」に出展

5月26日(金)・27日(土)の2日間、福岡国際センターにおいて「2017九州印刷情報産業展」が開催され、当社は昨年に引き続き出展いたしました。昨年4月に発生した熊本地震による防災意識向上を受け、土を使わない吸水土嚢「スーパーブロック」や電力を使用せずに暗闇で長時間光るテープ「α-FLASH」、非常用簡易トイレセットなど、機能性に優れた防災関連商品を中心に紹介し、多くの来場者の関心を集めました。



▶ 関係会社「ハウカンTOKYOビジネスサービス」設立

当社はさらなるポートフォリオ改革をめざし、今年4月に「ハウカンTOKYOビジネスサービス株式会社」を設立しました。今後の高齢者人口増加を受け、厚生労働省では2025年を目標に、「地域包括ケアシステム」の構築をめざしています。同社では同政策に基づく社会貢献事業として、訪問看護事業の起業支援および設立後の運営支援を行ってまいります。

ハウカンTOKYOビジネスサービス株式会社

- 本店所在地:東京都中央区明石町6番24号
- 設立日:平成29年4月3日
- 代表者:代表取締役社長 甲斐 昭二

～8/18(金)

EXHIBITION

TSUNAGU GALLERY vol.3 仙台七夕飾り

当社関係会社の鳴屋紙商事が制作した、仙台七夕まつりで使用される本物の笹飾りを本社エントランスに展示します。どなたでも自由にご覧いただけ、短冊にお願い事を書いて飾ることもできます。色鮮やかな趣向を凝らした手づくりの笹飾りを、ぜひ間近でご覧ください。※見学をご希望の方は受付にお声がけください。



DATA

- 会場: 国際紙パルプ商事本社1Fエントランス
- 料金: 無料
- 問い合わせ: 国際紙パルプ商事 経営企画本部 CSR・広報課
- TEL: 03-3542-4169
- HP: www.kppc.co.jp

7/29(土)・30(日)

EVENT

川越百万灯夏祭り

蔵づくりの街がカラフルな提灯で飾られる、小江戸・川越伝統の夏祭り。期間中は川越藩ゆかりの時代行列、火縄銃砲隊の演武(空砲射撃)など歴史と情緒を感じられる、さまざまなイベントが催されます。

DATA

- 会場: 本川越駅前～札の辻、連雀町交差点～松江町交差点および周辺商店街(埼玉県川越市)
- 料金: 無料
- 問い合わせ: 実行委員会
- TEL: 049-229-1820
- HP: www.kawagoe.or.jp/natsumatsuri/

8/8(火)・9(水)

EXHIBITION

文紙MESSE2017

有数の文具・紙製品メーカーが一堂に集う、日本最大規模の一大見本市。出展ブースには、文具、紙製品、画材、デザイン用品、オフィス用品、OAサプライズなど、多彩な商品が並びます。一般ユーザも入場可能。

DATA

- 会場: マイドームおおさか (大阪府大阪市中央区本町橋2-5)
- 料金: 無料
- 問い合わせ: 協議会事務局
- TEL: 06-6768-4919
- HP: www.bunshi-messe.com/

8/6(日)～8(火)

EVENT

平成29年度 仙台七夕まつり

青竹に飾られた和紙が薫風にたなびく、仙台夏の風物詩。仙台の目抜き通りをはじめ市内全域に、吹き流しやくす玉など色とりどりの笹飾りが掲げられ、その豪華さを競い合います。約3,000本の笹飾りが街を埋め尽くす絶景を、心行くまでお楽しみください。



DATA

- 会場: 宮城県仙台市(市内全域、中央通り、一番町などの中心部)
- 料金: 無料
- 問い合わせ: 仙台七夕まつり協賛会(仙台商工会議所内)
- TEL: 022-265-8185
- HP: www.sendaitanabata.com



仙台七夕まつり協賛会

8/16(水)

EVENT

嵐山灯籠流し

京都のお盆を締めくくる精霊送りの行事。僧侶によって法要が営まれたのち、6000から7000基もの灯籠が桂川に流されます。この日は五山送り火の当日にあたり、大文字(鳥居形・大文字)も見ることができます。

DATA

- 会場: 嵐山渡月橋、中ノ島公園付近 (京都府京都市右京区)
- 料金: 無料(観覧)
- ※灯籠供養は1基1,000円(水塔婆1枚付き)
- 問い合わせ: 嵯峨湯徳連盟
- TEL: 080-5307-1060
- HP: www.geocities.jp/butto_renmei/

8/26(土)・27(日)

EVENT

三河一色 大提灯まつり

約450年の歴史を誇る、三河一色諏訪神社の例祭。6組12張の大提灯は、一番大きいもので長さ10メートル。巨大なロウソクに神火が灯ると、提灯に描かれた神話や歴史の場面が漆黒の闇夜に浮かび上がります。

DATA

- 会場: 三河一色諏訪神社 (愛知県西尾市一色町一色宮添129)
- 料金: 無料
- 問い合わせ: 西尾市観光協会
- TEL: 0563-65-2170
- HP: www.katch.ne.jp/~suwa-jinja/

※開館日、開館時間などは、各ホームページにてご確認ください。 ※イベント、展示は、諸事情により変更される場合があります。おでかけの際は、事前にホームページまたはお電話にてご確認ください。



輸送マイレージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。

エコ・プレス
バインダー

針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。



国際紙パルプ商事株式会社
KOKUSAI PULP&PAPER CO.,LTD.

発行: 経営企画本部 経営企画部 CSR・広報課
〒104-0044 東京都中央区明石町6番24号
TEL (03) 3542-4111 (代)

URL <http://www.kppc.co.jp/>

作る

紙と触れ合い、モノを作る

「PAPERCRAFT on the DESK」

布施知子さん考案

七夕柄の「自在トレイ」

七夕飾りに欠かすことのできない「青竹」と「短冊」をモチーフにした収納トレイです。考案していただいたのは本誌vol.22にご登場いただいたORIGAMIアーティスト、布施知子さん。折り幅によって完成形のカタチが変わるので、楽しみながらオリジナルの収納トレイをつくってみてくださいね。

「作る」vol.32使用紙：竹紙100ホワイト(81.4g/m²/中越パルプ工業株式会社)

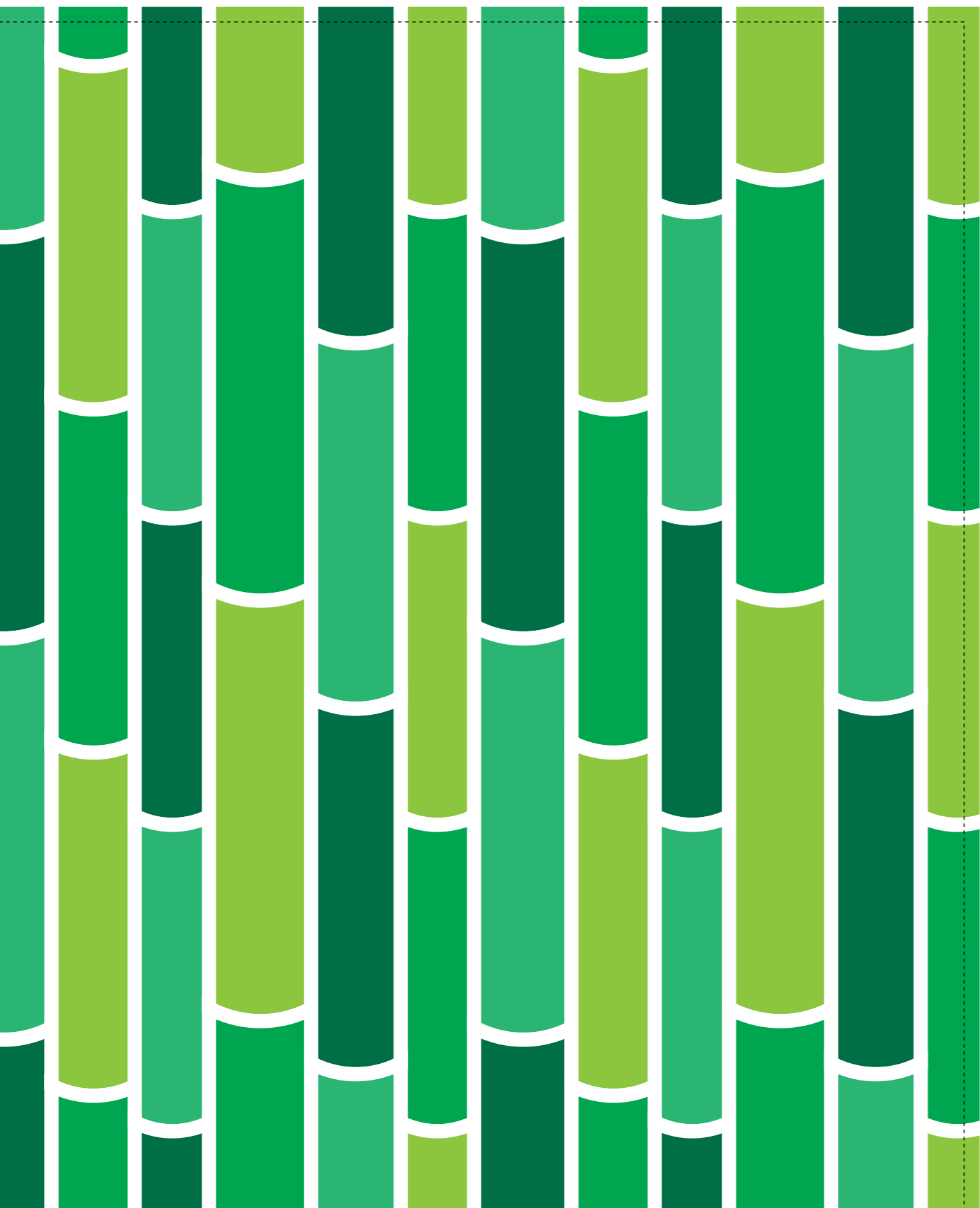


竹紙は、国産竹100%でできた紙です。1998年に始まった社会的課題の解決に挑戦する中越パルプ工業の取り組みです。使われない竹2万トン/年を持続的に紙の原料にすることで、隣接する森林、里山、生物多様性の保全に役立ち、地域経済にも貢献しています。

当社と当社子会社の鳴海屋紙商事株式会社では、2012年度より「仙台七夕竹紙プロジェクト」に取り組んでいます。東北三大祭りのひとつである仙台七夕まつりで使用された孟宗竹を回収し、中越パルプ工業のご協力のもとで竹紙の原料の一部に使用しています。

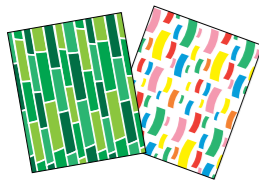
つくり方はウラ面をご参照ください。

切りとり線 -----

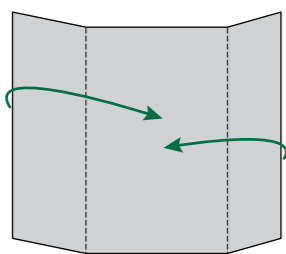


作り方

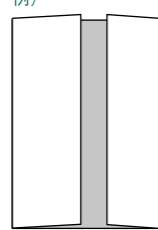
1 柄の異なる2種類のシートを、切りとり線に沿って切り出します。



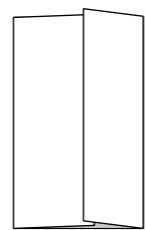
2 左右両側を、自由な幅に折ります。(左右を同じ幅にしない方が、より楽しめます)



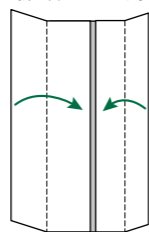
例)



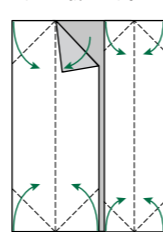
左右が重なってもOK



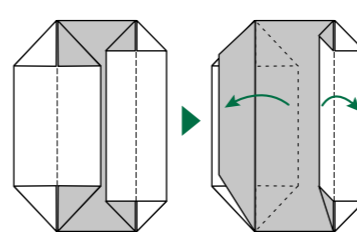
3 折った両側を内側に向けてさらに折り、折り目をつけます。



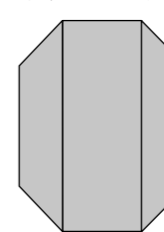
4 折った部分を開き、図にある8つの角をすべて折ります。



5 3の折り目が中心になるようにして、図にある8つの角を外側に折り返します。

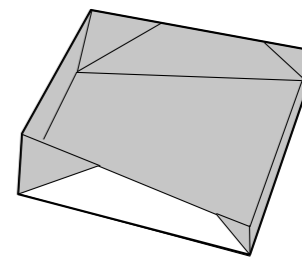


6 図を参考にして、上下を内側に、左右を外側に開くようにつまみ上げます。



角をつまんで立てながら、ふちも立てる。

4つ角をしっかり折り、立ち上げれば



ウラ面

完成!

折り幅によって完成形のカタチが異なります。あなただけのオリジナル・トレイをつくってみましょう!

